

第 14 回 講義ノート 教育と差別

教育において平等、差別がないということはとても大事です。

アメリカの社会ではいまだ人種差別が大きな問題になっています。日本人の場合、アメリカ社会のように差別を感じる機会はないように思いますが、これから社会が国際化していく中で、差別と無縁ではありません。

特に学校には国際化に伴い、外国籍の子どもの入学してくるようになっていきます。

千葉市でも稲毛海浜公園に近い市立の高浜小学校には 4 割以上の子どもの外国籍です（中国籍の子どもの多い）。

皆さんが教員になった時、クラスに外国籍の子どもの在籍しているケースも多いと思います。

その時、その子たちを差別することなく、皆平等に扱うことが大事です。

ただ、その平等というのが、形式的に日本人の子どもと同等に扱うということだけではいけない（実質的な平等をはかる）ところが難しいことです。（そのことは、教育社会学など、別の授業で扱われることになるでしょう）

差別は、人種や国籍だけでなく、人の属性の差異（性別、出身、階層、地域等）からも生じます。

今回は、アメリカの差別教育の様子を **you tube** で見て下さい。

これはアメリカの小学校の授業風景で、英語の勉強にもなります。また教師の児童に対する影響の大きさも実感することになるでしょう。

閲覧サイト（「青い目茶色い目」）

<https://www.dailymotion.com/video/xp34v2>

それを観た感想を、いつものように 200～1000 字程度で、「課題・提出」のサイトから送って下さい。

以下に、内容の紹介 (teraken.gooside.com/aoimechairaime.html) を転記。

青い目 茶色い目

～教室は目の色でわけられた～

A CLASS DIVIDED

制作 WGBG (アメリカ)

構成 ウィリアム・ピーターズ 45 分

<内容紹介>

1968 年 4 月、アメリカ北西部のアイオワ州・ライスピルの小学校で人種差別についての実験授業が行われた。

小学 3 年生の担任であるジェーン・エリオット先生は、キング牧師の死後、黒人指導者に無神経な質問をする白人の解説者の傲慢な態度を見た。そして「子どもたちを差別意識というウイルスから守りたい」という思いを持ち、次の日にある実験授業を試みた。

クラスを青い目と茶色い目の子どもに分け、「青い目の子はみんな良い子です。だから 5 分余計に遊んでもよろしい」「茶色い目の子は水飲み場を使わないこと。茶色い目の子はダメな子です」というように、青い目の人は優れ、茶色い目の人は劣っていると決めて 1 日を過ごすというものだ。

逆に翌日は茶色い目の人は優れ、青い目の人は劣っているとして生活する、というものだった。実験の様子は ABC 放送の「目の色が巻き起こした嵐」と題した映像として残されている。

エリオット先生のこの授業は差別される側の気持ちを実際に体験し、子どもたちの人種差別に対する考えを変えることができた。

そして、もう一つ重要なことが判明した。実験授業の 2 週間前と授業をしている 2 日間、そして授業の 2 週間後に国語と算数のテストを行った。子どもたちの点数は優れているとされているときに最高で、劣っているとされている時に最低を示した。そして、授業後はクラス全体の成績がかなり高くなったという。

2 日間の授業で大切なことを学び、その大切なことを学んだという意識が生徒たちに自信を与え、優れていると言われた時の高い得点を維持できるようになったのだった。

エリオット先生は教職を去り、人種差別に対する犯罪がなくなることを願って全米各地の刑務所や企業でこの試みを行っている。この作品の中にも刑務所で職員に対して行われた講習会の様子が紹介される。

実験授業の主旨を説明せずに目の色によって差別をして講習会を進め、差別された青い目の職員らはその理不尽さ、深い絶望感を感じることになる。このように、エリオット先生の実験授業は大人にも子どもにも人種差別と真剣に向き合い人種差別を身近なものとして捉えることを可能にした。